

勝川春章筆『婦女風俗十二ヶ月図』における〈俗〉の考察

—— 構図分析と先行作品との関連から

竹中 悠美 (立命館大学)

浮世絵研究は版画の比重が大きいものの肉筆画についても進められてきた。とりわけ近年目覚ましい成果を挙げているのが明和(1764-71)から寛政(1789-1800)にかけて幅広い人気を得て勝川派を築いた勝川春章(1743-93)の肉筆美人画をめぐる研究である。内藤正人の『勝川春章と天明期の浮世絵美人画』(2012)を筆頭に廣海伸彦(2014)、向井大祐(2016)等の論考は、春章の美人画のなかでも「神品」と讃えられる『婦女風俗十二ヶ月図』(1783頃)の精緻な描法、ならびに古典に通じた内容で趣味人として知られる大名に愛でられたことを詳らかにし、浮世絵という〈俗〉な絵画における〈雅〉の極みに迫ろうとした。

本発表はそれらの先行研究を参照したうえで、『婦女風俗十二ヶ月図』の寸法と背景の室内空間に焦点を置いた構図および先行作品の構図とモチーフの結びつきにも注目することで、本作品が春章の他の肉筆美人画と比較しても格外的特徴を有することを論じるものである。

『婦女風俗十二ヶ月図』は本来六曲一双の屏風に描かれた十二の月次図であったとされるが、現在は軸装された十幅のみがMOA美術館に所蔵されている。本発表では、まず本作に関する昭和期の研究に基づいて各々の主題を示し、「九月 重陽」のみが遊郭の遊女で、残りは武家と裕福な町人の上臈たちと見なされてきたことを確認したうえで、上述の平成期の研究の論点を年代考証・制作手法・想定復元・パトロン・雅俗論の五つに集約する。次に、春章の別の肉筆月次図『婦人風俗十二ヶ月図』(千葉市美術館蔵)およびその他の軸装された肉筆画と比較しても飛び抜けて細長い寸法の本作は、「柱絵」と呼ばれる浮世絵のカテゴリーに近似していることを構図の参照関係も含めて提示する。さらに絵の背景として左右から切り詰めたように描かれた室内空間は、細部を省略することなく軸測投影法と斜投影法を用いて緻密に描かれ、一幅ごとに奥行き方向と視線の後景化・前景化が変化していることを示し、本作が六曲一双の屏風として鑑賞されたときに感取されたであろう空間認知のダイナミックな変化とその新規性を指摘する。加えて、室内空間の構図と配された事物やモチーフにおいて、北尾長政と春章の合作による遊女絵本『青楼美人合姿鏡』(1776)と緊密な結びつきがあることを示す。

以上より本発表は、大名家の什物に相応しく雅俗融和を成した本作における特異な空間表現とその視覚経験を創出した春章の当世風な〈俗〉の試みを考察するとともに、歌舞伎と遊里という限定された空間から、浮世絵の場景と主題が世間一般へと拡がり、多様な人物と風俗が再び描かれはじめる明和・安永の変革のなかで春章という浮世絵師の位置づけの再検討を促すものである。